令和５年３月 31 日

第２５回松本清張研究奨励事業　企画書

慶應義塾大学経済学部教授　尾崎裕之

【研究課題】『本格ミステリー作家としての松本清張氏 －『ミステリーの系譜』を手掛かりに』

【はじめに】企画書では、本研究を進めるにあたっての、研究の背景、研究動機、研究目的とその意義、研究方法、などについて、それぞれ簡単な説明を加えることにする。ただし、以下で注意していただきたいことは、本企画書の残りの部分、および、当該研究を進めるにあたって筆者（以下では、尾崎を指す）が採用を予定しているアプローチについて書いた「参考資料」（別添）では、あえて正確性をいささか欠く形で述べていることである。

いま「正確性を欠く」と述べたのは、あらゆる形式の小説では「参考文献」を明示することは極めて稀であり（小説の成立背景を研究するいわゆるタイプの「ノンフィクション作品」にはこの限りではないものも多い）、どの作家のどの作品が、どの先行小説のどの部分を、意識的・無意識的は問わず、先行作品の「引用」によって、あるいは、先行作品に inspire されて書かれたものであるのかは、読者には推測するしかないという小説・文学という作品形態に固有の問題点が存在するからである。（もちろん、例外もあろう。）筆者が生業としている研究論文執筆の世界では、無断借用は「剽窃」とみなされ、研究者生命を絶たれる場合も少なくない。小説の執筆と論文の執筆は、その本質や目的が大きく異なっており、どちらが良いかという問題に落とし込むことは原理的に不可能ではあろうが、筆者が提案している研究にとって、この慣習が多少の障害になることは確かである。

筆者は小学生以来、それこそ膨大なミステリー小説、並びに、その周辺に位置する小説・評論を読んできたが、それは一読者としてあくまで趣味の範疇として読んできたのであって、もとより研究の為でも、向学心の故でもない。卑近な表現で言えば、娯楽の為である。今回、松本清張研究奨励事業に応募させていただくにあたって、遠い記憶を振り絞ることは当然のこととして、その記憶を頼りに「書かれた事実」を探し出し、それをもって以下で述べる目的を達成することが本研究の「メタ目的」であり、比重はむしろ「メタ目的」すなわち、本格ミステリー小説史を松本清張氏（以下、「清張」と表記し、一般的に、個人名は敬称略とさせていただきます）を中心に可能な限り科学的な方法に則って documentation （信頼の置ける document(文書)を作成すること）を行う

ことが研究の基本的なスタンスであることを最初に申し上げておきます。故に、以下では研究途上でもあることを鑑みて、検証の必要がある点については、「要出典」「要検証」などと明記することとします。また、筆者の推測が多分に含まれる場合には、そのこと（推測であること）がそれとわかるように、明確な形で記述します。

【研究の背景】清張はその小説家キャリアの冒頭において、短編歴史小説『西郷札』（1951）と短編『或る『小倉日記』伝』（1952）を上梓するが、前者は直木賞候補となり、後者は芥川賞を受賞する。その後、清張はミステリー色の極めて濃厚な『点と線』（1957）を発表するが、これが彼にとっての本格ミステリー小説のデビュー作となる。その後、清張は、本格ミステリーの定石に従いつつも（後段で説明する）、社会問題に果敢に切り込み、特に、日本が GHQ の占領下にあった時代には、占領下特有の日本が置かれた社会状況を描き（例えば、ノンフィクション『日本の黒い霧』（1960））、また、晩年には「皇室」を巡る新興宗教の問題（小説『神々の乱心』（1997、未完））を発表した。清張はこのように、我々の直面せざるを得ない現実社会のリアリティ（時刻表の使用、名探偵の不在、など）を極力作品世界に織り込み、往々にして時の権威に抵抗する物語を紡いできた。このような清張文学を指して「社会派ミステリー」と呼ばれることになるのは自然の成り行きであったのかもしれない。このことは一面では、それ以前の江戸川乱歩や横溝正史といった本格・変格ミステリーの巨匠たちによる「お化け屋敷・見世物小屋の世界」とは一線を画するものとして歓迎されることになる。乱歩自身も、庶民らによる遊戯性の高い集団文芸であった俳諧を、俳句という 1 つの文学の境地にまで高めた芭蕉のごとき人物が、ミステリー界にも颯爽と登場することを待望していたとされ（いわゆる「一人の芭蕉の問題」）、清張こそがまさにその人であるとの評価も存在する（要出典）。

その一方で、島田荘司『占星術殺人事件』（1981）を契機とし、綾辻行人（1987）の一連の「館シリーズ」でその地位を盤石のものとした感のある「新本格ミステリー」が 80 年代の末期に台頭してくる。これは極論すれば「社会派ミステリー」で重視された動機を含む小説世界のリアリティの側面を一切排除し、あくまで「パズラー（謎解き）」の側面のみを重視する小説世界を構築せんとするムーブメントとみなすことができる。

甲賀三郎と木々高太郎のミステリー論争（ミステリは文学か否か、1935-36）はあったものの、清張以前はおどろおどろしい（場合によっては、一族の血の歴史が一連の犯罪の重要なファクターであるなどといった）特殊な（多く場合、人工的に設定された）陰惨な物語背景を持つ物語が本格ミステリーであり、その後、清張の社会派ミステリー主流の時代の登場を経て（そこでは、旧家に巣くう怨霊の祟りのごときは極力駆逐され

ていく)、ミステリーが時代を反映する鏡のような役割を担う時代がしばらく続くようになる。ところが、時代は今や再び「新」とは付くものの乱歩・横溝の本格ミステリーの時代（基本的はパズラーであるが、何者かによる祟りを偽装するものや、一家に流れる忌まわしい血による避け得ない宿命といった要素を徹底的に排除した、「より洗練された」パズラー）に回帰しているように見える。

さらに、現代のミステリー文学においては、本格、特に新本格（新本格においては、「叙述トリック」が重要なカギを握ることが非常に多い）特有のパズラー的要素を全面的に据えたトリックを中心したものがミステリー小説の主流のような感さえある。そこにはリアリティよりも（メタトリック・叙述トリックのような）作者による「技巧」が重視され（清張による読みやすく美しい文章技巧とは全く違った意味の）、例えば、2012年に、東野圭吾『容疑者Xの献身』（2005、多分に新本格の傾向を有するアクロバティックな小説）が、ミステリー小説を対象としたアメリカの著名な賞の候補に選ばれたことなども、その潮流に拍車をかけた感がある。

【研究動機】以上概観してきたような「日本ミステリー小説史」の単純化した要約を背景として、新本格を待望してきた、または、それを賞賛する立場の読者・評論家サイドの一部による、「いわゆる社会派ミステリーは本格推理小説の発展を遅らせたのではないか」との言説を耳にすることがある（要出典）。特に、筆者の記憶では、その「戦犯」として清張を名指しすることさえあったと思う（要出典、要検証）。これなどは、反駁する必要すらさえない、全くの妄言であることは論を待たない。

しかしである。このような一部による重大な誤解に対して、単に彼らに「無理解」の烙印を押してしまうことにも一抹の躊躇を感じないわけにはいかない。というのも、清張氏の文学作品群は、およそ一人の人物が生涯をかけて生み出したことが俄かには信じられない程の余りにも膨大な量に達するからである。また、その一作品、一作品が非常に高い文学作品としての質を維持しており、また、その作品世界は非常に広範囲な射程を有している。

『古代史疑』（1963）（この作品は井上光貞氏ら、当時の古代史の第 1 人者が積極的に取り上げた）、連作短編集『日本の黒い霧』（1960）（GHQ 占領下で起こった不可解な事件を取り上げた本書の中でも、とりわけ当時の国鉄総裁・下山定則死亡事件を取り上げた章に関しては、その後、矢田喜美雄『謀殺・下山事件』（1973）などをはじめとするいわゆる「下山本」の出版が相次いだ。現在に至るまで、その真相は不明であるが、この論争は清張を嚆矢とする）、文庫本で全 9 巻に及ぶ『昭和史発掘』（1964－71）では、特に 2・26 事件について、文献に基づいた清張流の堅実かつ詳細な分析が近年再

評価されつつある（要出典）。以上は、清張のノンフィクション作品の主だったものに過ぎない（すべてを網羅しているわけではない）。

また、その一方で、清張はフィクション作品（推理小説）もそれこそ数え切れないほどの短編・中編・長編を上梓した。そのいずれもが、非常に質の高いものであり、その多くが繰り返し繰り返し、映画・テレビドラマに翻案されて放送されている。ここで清張は、体制に翻弄される人々、人間関係の機微、親子の情愛など、現実社会で生活を営んでいる人たちに焦点を当て、社会派、あるいは、「人間派」とも呼ぶべき名作の数々を世に送り出してきたことは間違いない。

以上で概観してきたような清張の膨大な作品群（フィクション・ノンフィクションの双方を含め）に正面切って体当たりすることは無謀であるし、また、そのことによってどれほどの効果が期待できるのかも定かでは無い。そこで、これらの作品群から、本格ミステリーに欠かせない「核」となるものだけを抽出し、それ以外の側面にはあえて目を瞑り、場合によっては大鉈を振るってこれらを切り落とすという思い切った戦略が、この作品群を真に理解する一つの座標軸を提供してくれるのではないかと考えた。そして、そのような着眼点を得たことこそが、そもそもこの研究に取り組んでみようと考えるに至った動機である。もちろん、清張作品の際立った特徴を 1 つ 2 つ選び出し、その点に焦点を絞って研究を行うこと（それとても容易なことではないだろう）は十分意義深いことであることは十分に認める。過去の本事業の「入選者」の課題を拝見するにも、そのようなアプローチをとられた方々が多くいらっしゃることが良くわかる。

それでは、上述の本格ミステリーの「核」とは何であろうか？この点については、別添の「参考資料」で詳しく述べる予定であるが、当面、「謎とその合理的な解明」としても問題はないであろう。これを、「本格性」と呼んでもよいかもしれない。「本格性」はオーケストラの演奏における「通奏低音」のようなものとしての解釈も可能である。清張作品には、フィクション作品であっても、ノンフィクション作品であっても、この「本格性」を（作品によって若干の程度の差こそあるものの）まったく欠いてしまっているものはない（筆者の推測を含む）。

【研究目的とその意義】前段で述べたことを今一度敷衍するならば、清張作品は「社会派ミステリー」である以前に、「謎とその合理的な解明」をモチーフとしている限りにおいて、「本格性」を有していなければならない。

終戦を迎え、探偵小説（推理小説）を執筆することが許されるようになると、横溝正史のような作家たちは、以前執筆していた「御伽草子」のような物語から脱却し、本格ミステリー作家に変貌を遂げた。横溝正史『本陣殺人事件』（1946）がその代表例であ

ろう。

清張も彼（女）らのような本格ミステリー作家の「本格性」を継承しつつ、それを清張独自の題材選びや筆致を用いて「本格ミステリー作家」として歩み始めることになる。その題材選びや筆致、および、清張の持って生まれた強い正義感が、彼をして「社会派ミステリー」の泰斗と呼ばれる位置に押し上げたのであろうことには全く異論はない。しかし、繰り返しになるが、彼は、「本格性」が彼の主張を最も的確に表現できる小説形態であることを見抜きかつ体得し、その「本格性」を、正にそうあるべきものとして彼の小説世界の中心に堅持し、本格ミステリー作家として邁進していったのである。

実は、今見たような清張の「本格性」への偏愛は、これも添付の「研究資料」で詳述するが、彼自身がノンフィクションとして著した『ミステリーの系譜』（1967）に余すところなく表明されている。『ミステリーの系譜』では、大正期および昭和前期に日本のとある場所で実際に発生した事件に材を取り、その事件に潜んでいる一見しただけでは何が起こったのかが（起きているのかが）分からない「謎」と、それを清張自身が、関係者の供述調書などの助けを借りながら「合理的な方法で」解き明かしていく過程が綿密に綴られている。これについても、「参考資料」（別添）で詳述しよう。

以上を敷衍すると、以下のように纏めることができよう。清張の『ミステリーの系譜』を手掛かりとして、利用出来得る限りの資料（この場合、清張作品、その他の作者の作品群、および、それらに関して事情を良く知る関係者の聞き書き）に基づいて、次に述べる主張についての検証可能な科学論文を執筆・提出することを本研究の目的とする。すなわち、戦後、「本格推理（探偵）小説」として復興を遂げた小説分野（横溝正史『本陣殺人事件』（1946）などを代表とする）に特徴的な形態、すなわち、「本格性」を堅持し、同時にその新しい発展を模索することによって、今日の（新）本格ミステリー小説が開花し隆盛を誇る基盤を準備したのは、他ならぬ松本清張である。

このような視点で清張を捉えなおすことは、松本清張という一個の偉人の業績に対して新しい大きな価値を再発見することになるのではないだろうか。

【研究方法】「謎の提示と、その合理的な解明（＝本格性）」に焦点をあてて清張作品を読み返すことから始める。その際に、上段の方で説明をしたとおり、清張作品の「本格性」に焦点を集中して再読を行う。

例を使って、このことを今少し具体的かつ丁寧に説明させてほしい。清張の『砂の器』（1962）はその映像化とも相俟って、彼の小説群の中でも際立って人口に膾炙した作品と言えよう。親子の情愛をメインテーマに据えた野村芳太郎監督の映画は大ヒットしたが、小説『砂の器』を上で述べた方法論で分析してみると、「謎」にあたるものは以

下で示すような相反する２つの事実から構成される。

（１）被害者の男性が作害されたと思しき時刻の直前に（被害者が特定されるのは随分と後になってからである)、彼が、若い男性とスナックで話をしているのが女給によって聞かれており、東北弁、いわゆる「ズーズー弁」(筆者に差別の意図は一切ないことを明記しておきます）で「カメダ」という単語がもっぱら被害者の口から発せられていたという女給の証言。

（２）この情報をもとに捜査員が秋田県「羽後亀田」を中心に徹底的な捜索を行うが、身元不明者を含め、事件性の兆候は一切感じられなかった。

他の手掛かりがない以上、ズーズー弁を語る（少なくとも理解できる）人物が容疑者である線が濃厚であるが、そのような東北地方出身者は捜査線上には全く浮かんでこなかった。これが、「砂の器」の冒頭で明らかとなる事件の「謎」ということになる。

小説の後半、捜査員の思い付きから言語学者に問い合わせたところ、出雲の或る一地域において、「ズーズー弁」と極めて似た音韻を持つ方言が話されている事実が判明し、事件は俄然解決に向けて走り出すことになるが。これが謎の合理的な解決に相当する。

小説では、(映画による影響であろう）親子の「道行」のシーンが時間的にも終盤の大部分を占め、『砂の器』が本格ミステリーであることを忘れてしまいそうになるが(実際、幼少期にこの映画を観たときには、緒形拳さんや加藤嘉さん等の演技に、筆者も涙を堪えることができなかった)、「本格性」について語るのであれば、それは日本各地の諸風景を捉えた美しいシーンとは独立に、「ズーズー弁」の謎と、それが出雲の一地域で使用されていることの発見という合理的な解決、という、本格ミステリーの枠組みにしっくりと収まっていることが分かるのである。(余談ではあるが、何故この例にみられるような方言の「飛び地」が発生したのかについては、筆者は非常に大きな興味を感じている。)

なお、本作では、「超音波による殺人」という他に例を見ないような殺害方法が登場するが、これなども清張の「本格性」へのこだわりと捉えることが出来よう。(映像作品では、この意匠は完全に無視されているようではあるが。要確認)

本研究の方法は、今例示したように、清張作品における「本格性」の抽出と、それが、同時代や後続の作家達に直接･間接に大きな影響を与えていることをdocumentation という手法によって検証することである。

筆者は、清張の、或いは他の作家の作品を区別なく読んでいるが、前述したように、その内容は記憶というあやふやな領域に留め置かれているため、必要に応じて読み直し、documentationすることをする。特に、清張以後、現在に至るまでの（新本格ミステリーを含む）ミステリー作家達の作品群を再度紐解き、それらの「本格性」が直接・間接

に清張の「本格性」の影響を受けていることを documentation することによって裏付けたい。

冒頭にも述べたことではあるが、推理小説分野では、「参考文献」「先行研究」の類を明記することは極めて稀であるため、必要に応じて、先人の皆様の本格ミステリー評論集などを参考にさせて頂くことも多いのではないかと予想している。以上述べてきた方法により、【研究目的とその意義】で述べさせていただいた本研究で行いたいと筆者が望んでいることが、ある程度の確からしさで達成できるのではないかと期待している。

＊なお、添付の「参考資料」では、未だまだまだ不完全ながらも、【研究方法】で述べた方法に即することによって、清張作品が新本格を含む後続作家達へ、清張の持つ「本格性」を確実に引き継いでいっていることの証左を、幾つかのテーマごとに分析・（不十分ながら）明らかにしてみたつもりである。最終的な研究結果とはまだまだ距離はあるが、その極めてラフな叩き台のようなものと考えて頂ければ、参考資料としての役目は果たせたといってよいと考えます。

松本清張研究奨励事業応募に係わる【参考資料】

「松本清張から始まる本格ミステリーの系譜」

尾崎裕之

企画書でも既に示したとおり、本研究の目的は、今日の本邦の（新）本格ミステリーが日本国内に留まらず、海外においても高い評価を得ているという我々にとって歓迎すべき現状が、清張作品に特有の「本格性」を、清張自身やその後続作家達が、堅持、発展させて来たことに帰すべきであることを可能な限り科学的に論証することであった。

ここで「科学的に」と言っているのは、元来、小説文学には慣習上馴染みの余り無かった、「引用」並びに「先行研究」といった小説と小説の関係性を明示する記述が小説内部（特に、巻末）には書かれていないことが多いという事実を前提として、実際に小説内に書かれた文言を分析することにより、そして場合によっては、筆者の推測、関係者の見聞やミステリー文学研究書などの知見を援用しつつ、その関係性を明らかにしていく方法論を指す。例えば、非常に類似したトリックが、先行する小説でも使われている場合などにおいては、それを単なる偶然とみなすよりは、後発トリックが先発トリックを何らかの形で模倣したと考えることの方が合理的な場合があるが、そのようなときがこれにあたる。

この「参考資料」では、ある事実の証左となり得るような客観的な証拠書類のようなものを提出することが主催者側からは想定されていると思うのであるが、上の段落で述べたように、本研究においては、それに合致するような客観的な証拠は基本的には存在せず（現代のように「コピペ」が簡単に行えるような技術が存在する場合には、或いは、全く同じ字面が長々続く場合などがこれにあたる可能性があるもの、清張の時代背景を考慮すれば、これはそれほど現実味のある問題ではないと判断できる）、あくまでも、印象論的な操作がそこに含まれるという側面は免れ得ないであろう。

以上のことを前提条件として、清張の「本格性」が同時代・新世代の小説家に大きな影響を与えていると判断することが合理的な場合の幾つかについて、場合別けを行った上で、予備的考察を加えることが、この「参考資料」の目的である。

なお、蛇足的に付け加えるとするならば、ここでも現時点では、推論を厳密にトレースできていない場合が多く、「要出典」「用検証」が多発する。これもまた、企画書冒頭の【はじめに】で記述した本企画の「メタ目的」として、今のところはご寛恕をお願いしたい。

（１）本格ミステリー小説の定義

研究を進めるに当たって最も基本となるのは、本格ミステリー小説という語句が何を指し示しているかについて、一定の共通認識を作家、読者（好事家）、評論家が共有することであろう。本企画書内では、これまで、「謎の提示と、その合理的な解明」を含む小説と定義してきた。本格ミステリー小説の定義は、それこそ人それぞれであろうが、今書いたものが、様々な定義の「最大公約数」であろうことに対して大きな反論は無いのではないか。例えば、横溝正史は「探偵小説というものは、作者と読者の知識競技なのだ。作者が読者に提供する謎が異常であればあるだけ、そしてしかもその異常な謎の『解き方』が合理的であればあるだけ、それはよい探偵小説ということができるのではないだろうか」（『ロック』誌上、『蝶々殺人事件』の連載に先立って。1946 年）。これなども、上記で採用した定義と完全とは言わぬまでも、ほぼ同じと見てよい。以下では、これまで同様に、「本格ミステリー小説」乃至は「本格探偵小説」とは、「謎の提示と、その合理的な解明」を含む小説と定義することにしよう。

「本格」という接頭辞は、「変格」に対応するものであるが、「変格小説」とは、主に戦前に書かれた怪奇・幻想趣味的な作品を指す。夢野久作『ドグラ・マグラ』（1935）、小栗虫太郎『黒死館殺人事件』（1935）が代表的作品とされるが、これらと清張の関係については、後者については僅かに触れるが、一般論としては本研究では触れない。

また、「ミステリー（謎の意）」と「探偵」の違いもあるが、これはこの種の小説群にはいわゆる「名探偵」が登場することが多いことから、違いが生じていると思われるが、これについては後述する。

（２）島田荘司と『本格ミステリー宣言』（1989）

本格ミステリー小説に対する実作者からのスタンスについては、島田荘司『本格ミステリー宣言』（1989）に詳しい。『占星術殺人事件』（1981）でデビューした島田は、同作にも登場した私立探偵・御手洗潔をシリーズ探偵とする一連の作品を執筆する一方、平行して、警視庁捜査一課の刑事である吉敷竹史を主人公とする『寝台特急「はやぶさ」1/60 秒の壁』（1984）に始まる別立てのシリーズも執筆する。（両シリーズが微妙に交差する趣向もある。）

『占星術殺人事件』がそうであったように、一般的に、御手洗潔シリーズの方にパズラー的要素がより濃厚である。つまり、その分だけリアリズムを犠牲にしているとも看做すことがでよう。島田の本格ミステリー観は概ね（１）で述べたものと一致するが、島田ミステリーの特長ともいえるパズラー性を支える主軸は、物語冒頭で提示される、それこそ「奇想天外な謎」である。この謎は、オカルト的要素を多分に含むものや、物理的に絶対にあり得ないものなど（要出典）、極めて過剰である。

この過剰な謎は、御手洗・吉敷両シリーズに共通のものであり、実際に島田は、『本格ミステリー宣言』において、本格ミステリーにおける過剰な謎の必要性（とその合理的な解明）を強く主張する。そして、島田によれば、同書で彼が展開した主張に忠実に書き下ろした作品が、『奇想、天を動かす』（1989）であった。

ここで、大変興味深いことが起こる。『奇想、天を動かす』は吉敷刑事シリーズの一編として書かれているが、島田作品の特徴である、過剰な謎とパズラー性とを堅持しつつ、そして、それがためであろうか、硬質かつ上質な「社会派ミステリー」として成功しているのである。清張のモチーフの 1 つでもある、弱者に対する眼差しが、小説全編を通して、本格ミステリー小説の形式を踏襲しているが故に、我々の胸に迫ってくるのである。このような形で、清張のアプローチが本格・新本格へと着実に受け継がれていることを我々は知るのである。

（３）動機の問題

清張は作品を執筆するに際して、犯行の「動機付け」を最も重要視している旨をどこかで語っていた強い記憶を筆者は持っている（要出典、要検証）。動機を分析することによって（合理的な謎解きの経過を経て）真犯人像へ肉薄できるというかぎりにおいて、たしかに「動機の問題」は「本格性」の中心に位置する問題として認識する必要があることは紛れも無い事実である。（清張の動機の強調は以下の論旨に極めて重要であるため、この点は綿密にトレースする必要がある。）

「動機」が重要であることは清張以前にも盛んに主張されていたことであり、ここでは例として、横溝正史『本陣殺人事件』（1946）を取り上げてみることにする。同作品では、機械式トリック（物理的トリック）を労した密室での犯罪が焦点となっているように一見思えるが、これは横溝自身も述べているように（要出典）、犯行の動機こそが本作品全体を支えている謎であった。それゆえにこそ、この動機の謎（ワイダニット）の、謎としての正当性を巡って本作品について賛否両論が戦わされたとも聞いている（要出典）。

このように、本格ミステリーにおいて極めて重要な「動機の問題」について、これを大きく分類するとなると、次の 3 つに分けることができるかもしれない。

（A）とってつけたような動機。あるいは、「言い訳」のような動機と言ってもよいかもしれない。犯人が見つかった後で、新たな事実が自供などによって明らかになり、それが動機と認められ、一連の犯罪捜査が幕引きを迎えるもの。パズラー要素の過剰な新本格系に多いような印象がある（要検討）。

（B）犯行動機が小説全体の核と言っても言い過ぎでは無いほど、動機の内容が作品の成否を左右するほどのもの。大阪圭吉の短編『とむらい機関車』（1934）や、それをリメイクした連城三紀彦の短編『桔梗の宿』（1979）などでは、動機の謎は、それを解明することが直接事件全体を解決することと等価となるほどに、「動機」は「本格性」の中心に位置している。

（C）前述の（A）や（B）での動機は、共に、犯罪の規模に照らして妥当な動機として作用するべく作家の思考によって人工的に作り出された 1 つの物語であり、この意味において、小説内において「本格性」に寄与する人工的な「パズラー」の 1 ピースである。

清張の行き方は間逆であった。頭で考えた動機が、実際の犯罪を誘発するのかしないのかを問うことを一旦止めてしまい（つまり、動機の妥当性を「本格性」に係わる物語としての観点から見ることを止めてしまい）、現実に発生した事件において、その動機が一体何であったのかを徹底して究明する作業をした後に、それを物語に持ち込み、その動機を中心に「本格性」を構築し直すというアプローチを取ったのである。つまり、先の（A）や（B）とは対照的に、事実をして語らしめるという清張による動機の問題への接近方法がある。これが 3 番目である。

以上の 3 つのタイプの動機が「本格性」および「本格ミステリー小説」に及ぼす効果は一体どのようなものであろうか。（A）については、動機は「本格性」に対して積極性を全く持ち得ないので、考慮の外である。（B）についてはどうか。これは、動機の妥当性に全面的に依拠せざるを得ない。というのも、そもそも、それは創作された動機であるからである。『とむらい機関車』『桔梗の宿』の動機は、犯行を重ねる犯人の哀しい心情に心を打たれ、筆者などは、立派な「本格性」をも有した傑作と評価している。

連城の『戻り川心中』（1980、表題作の『戻り川心中』を始め、『桔梗の宿』なども収める）、特にその表題作『戻り川心中』では、犯行動機が最早「本格性」の枠組みから滲み出してしまい、形容詞を伴わない「文学」の領域にまで侵犯している。それにもかかわらず、連城を本格ミステリー作家と呼ぶことに抵抗を感じない読者は、筆者を含め、相当に多いと思う（要検証）。企画書でも触れた乱歩の「一人の芭蕉の問題」は、清張とともに、連城の登場を待ってほぼ解決したと筆者は考える。（筆者による個人的な見解であり、検証を要する。しかし、清張と連城では、ベクトル（の方向）が違っていることは指摘しておく必要があろう。）

動機の文学性に関して、中井英夫『虚無への供物』（1964）に簡単に触れておくこと

は無意味では無いであろう。ここで中井はあまりに「高尚」な犯行動機を持ち出すことにより、本格ミステリー小説の「本格性」の解体を目指したのかもしれないし、あるいは全くその逆で、「本格性」を文学性への高みへと昇華させることを目指したのかもしれない（共に筆者の推論）。実際、『虚無への供物』は「アンチ・ミステリー」と呼ばれ、新本格支持者サイドからは概ね高く評価されているように感じる。『虚無への供物』の刊行年が、『点と線』を始めとする初期清張の本格ミステリー作品群の後であることは、連城の作品と同様であるものの、果たして『虚無への供物』を本格ミステリー作品に含めるべきであるかについて、多少の躊躇を感じるのは筆者だけであろうか。「アンチ・ミステリー」との評価はその意味で正しいことになるのであるが、「本格性」との距離感を考えると、興味深い研究になる可能性を秘めてはいるものの、これを本研究で取り上げることはしないことをご了解願いたい。

最後の（C）は本研究において重要な論点であるので、節を改めて述べることにする。

（４）清張にとっての動機問題と『ミステリーの系譜』

既に企画書でも触れたように、清張の連作短編集『ミステリーの系譜』（1967）は、大正期および昭和前期に実際に起きた３つの事件について丁寧な取材を行い、事件の経過、そして、何故そのような事件が発生したのかを、緻密に調べ上げて纏めたノンフィクション作品である。これは、清張にとっての動機の問題を検討する上で極めて重要な作品であるが、これまで、あまり積極的には紹介されてこなかった印象がある。

ここでは本作品の内、特に、昭和 13 年 5 月に現在の岡山県津山市で起きた大量殺人事件（津山事件）について書かれた「闇に駆ける猟銃」を取り上げる。この事件の概略は以下のようなものである。規定の年齢に達した M.T.（原作では姓名を明らかにしている）は、兵役検査を受けるものの、不合格となり、村でぶらぶらする他にすることの無い毎日を送っていた。ところが或る晩、秘密裏に準備して隠しておいた改造猟銃と日本刀を持ち出し、これらをもって、集落を形成していた同所在住の住人 30 人を一晩の内に殺害し、その直後、自殺を遂げたと言うものである。

清張の透徹な目は、当時記録されていた捜査資料をそれこそ眼光紙背に徹して読み込むことにより、この事件が有する 2 つの大きな謎を明らかにしている。第一に、何故、必ずしも頑健とは言えない一人の若者が（実際、兵役検査で落第している）、数時間の内に 30 人という途方も無いほど多くの人間を死に至らしめることができたのかという謎がある。この謎に対しては、清張は、犯人の現場における足跡を、実演さながらの正確さをもって再現していくことにより、M.T.が非常に効率的な仕方で（つまりは時間をかけた綿密な計画の下に）犯行を行ったことを明らかにした。

第二に、今焦点となっている動機の問題がある。何故、犯人はこのような殺戮を決行しなければならなかったのか。この謎を解明するために、清張は、事件当夜から日時を大きく遡り、そこから M.T.の犯行当夜にいたる心理的経過と、そして、結果としてその心理的経過と不可分であることが分かるのだが、彼を取り巻くこの集落の日常とを、つぶさに再現する。このことによって始めて、M.T.固有の問題のみならず、彼と、彼を取り巻く環境との不幸な係わり方の中にこそ、この事件の「動機」が存在することを我々読者は知り、それと同時に、このカタストロフィを回避する契機が、事件の経過の中に確実に存在していたことをも知るのである。

作品世界の中で語られる（説明される）パズラーのピースとしての動機と、現実世界における動機との間に大きな乖離が存在することを自覚しているからこそ、清張はその乖離を本格ミステリー作品で埋めるべく、動機の重要性を非常に強く説いているように思えてならない。（筆者の推測。要検討）

この節を締め括るにあたって、文献的な事柄に若干触れておきたい。「津山事件」に inspire されて執筆された作品は多く存在する。古くは、横溝正史『八つ墓村』（1971、角川文庫版）、最近では、白井智之『名探偵のはらわた』（2020）があるが、共に「津山事件」そのものを扱っているわけではないし、拠って、清張の動機問題とも直接の関係はない。

本研究との関連でより重要なのは、島田荘司『龍臥亭事件』（1998）と、筑波昭『津山三十人殺し』（2005）の二作品である。前者は文庫本で上下 2 巻の長編本格ミステリー小説であり、小説の本筋とは直接係わりは無いものの、かなりの分量を割いて津山事件の経過を詳しく記述している。後者は津山事件を正面から扱ったノンフィクション作品である。筆者がこれら二作品を読んで驚いたのは、事件の経過と犯行動機の記述が、ほぼ「闇に駆ける猟銃」の“引き写し”であり、清張の作品の意義を大きく超えるものでは無いという点である。（文献をつき合わして精密な比較検討をしたわけではないので、「引き写し」と断じるのは酷かもしれないが、この点は先行文献・後発文献の関係性の観点から慎重に分析する必要があると思われる。）しかしここでは、むしろ、清張の分析の的確さとその慧眼を称えるべきことと、清張の動機問題への取り組みが、現代でも極めて有効に機能することの証左となっていることを指摘しておこう。

（５）清張流の一人二役トリック

『球形の荒野』（1962）は清張作品の中でも非常に人気の高い作品では無いだろうか。何度も映像化されているし、ジャーナリストで作家の半藤一利氏が清張作品のベスト１に挙げていたのを記憶する（要出典）。姪（筆者の記憶があやふやです）が、神社に参

詣に行った際に、非常に特徴のある叔父の文字を記帳ノートに発見することによって、物語は始まる。叔父は確か、終戦時に外国で亡くなっている筈であった。その後、その記帳ノートの叔父の文字らしき物が切り取られていることが分かるに及んで、叔父の生死に係わる大きな謎が浮上してくることになる。

『球形の荒野』は、世界規模ともいえる「一人二役トリック」を実現した作品になっているのであるが、このようなスケールの大きな作品を他に見つけることはなかなかできない。歴史上の人物についてのものであれば、小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』（大正 13 年）や、それを現代風にアレンジした高木彬光『成吉思汗の秘密』（1958）による、義経＝チンギスハン説など、多く存在しているが、本格ミステリー小説での定石の 1 つである「一人二役」を、物語の中のトリックの 1 つといった扱いを大きく超えて、作品全体の骨子そのものにそれを適用して物語を紡ぎあげることに成功した作家は、清張が最初ではなかろうか（筆者の推論を含む）。

清張には、「熱い絹」（1972 年に執筆を開始するも、最終的には 1984 年に脱稿）という、マレーシアで実際に起きたタイシルク王と呼ばれた人物の謎の失踪事件を取り上げた作品もある。登場人物の名前なども全て仮名として、フィクション風に書いてはいるが、真相はかくあったのではないかと思わせるほどの緻密な推理を展開しており、事件当事者がまだ生存している（その中には、作品で犯人に比定されている人物も含まれる）時期にこの作品が発表されたことにも驚かされる。そして、「熱い絹」においても、清張は再度、世界規模の一人二役を作品世界の骨子に据えており、読者には全く予想もできない形で物語の決着をつけるべく極めて効果的かつ周到に一人二役トリックを用意しているのである。

この 2 作品における一人二役は、ただ単に即物的なトリックに終わること無く、清張流の「親子の絆・情愛」といった我々の持つ感情に強く訴えかけるストーリーテリングを展開することによって、彼独自のスケールの大きな「本格性」に到達していると思う。

最後に、一人二役は、「ゼロの焦点」（1959）でも使用されたプロットであり（上記 2 作品とは全く異なった仕方で）、親子の情愛については、言うまでも無く、「砂の器」（1960-61）などで典型的に取り上げられていることを蛇足ながら付け加えておく。

（６）名探偵の不在

清張作品には、シリーズ名探偵（江戸川乱歩における「明智小五郎」、横溝正史における「金田一耕助」、高木彬光における「神津恭介」、などなど）は一切登場しない。この、「名探偵」という「ガジェット」は本格ミステリー小説固有のもののように思われがちではあるが、実はそれは、「本格性」が成立するための十分条件も必要条件でも無い。

このことは、本格ミステリー小説である清張作品に、名探偵が登場しないこと、さらには、エルキュール・ポワロが物語の終幕で関係者を一同に会せしめ、徐に謎解きにかかる場面や、金田一耕助ものの「大団円」が、清張作品には登場しない（捜査会議の場面で真相が語られるという、一部の例外はあるとしても）ことからも分かる。

実は、名探偵の存在は、小説世界を展開していく上で、2 つの困難に直面することが分かる。第一に、名探偵は自らの考え、乃至は、探偵自身が握っている証拠を、物語の途中経過の場面において読者に開示することが無いということである。名探偵小説には、名探偵自身とは別に、「読者への挑戦状」という「ガジェット」が存在することがあり、これなどは物語の終盤に挿入されることが多い。これはすなわち、その段階に至るまでは、名探偵の知るところの全ての手掛かりを読者に開示しているわけではない、と言っているのと同じである。当然、最後まで主要な謎解きはなされないわけであるので、物語上、読者の緊張感を持続する必要性から第 2、第 3 の殺人が必要に迫られて（読者の興味を持続させておく装置として）発生することになる。本格ミステリー愛好家の中にも、この「中だるみ問題」を指摘する声は多いし、「名探偵の殺人防御率」などという、「本格性」とはほぼ無縁の概念すら近年登場している。

これに対して清張作品では、シリーズ探偵は登場せず、捜査に携わるのは、我々普通の人間と変わることの無い刑事たちである。それは例えば、『砂の器』におけるベテラン刑事の今西栄太郎のごとき人物である。彼らは、頭も使うが、それと同じくらい、或いはそれ以上に足を使って現場や関係各所の調査・聞き込みを行う。彼らは手に入れた手掛かりはその場で開示をするし、その手掛かりを基にした推測を読者と共に検討する。清張はさらに、刑事達がこれまでに掴んだ手掛かりなどによって分かったことを、場合によっては、箇条書きにして整理してまで、読者と共に丁寧にその推論過程を共有しようとする。

ここには、読者を出し抜こうとする探偵は存在しないし、「本格性」の柱の一つである謎の「合理的な解明」が、読者がまるでそれを自身が追体験しているかのような臨場感を持ってなされるのである。ここでは、読者は中だるみを感じる必要もなく、読者を飽きさせないための無駄な第 2 や第 3 の殺人を読者が待ち焦がれることも無い。

これまで述べてきた清張作品における「名探偵の不在」は、本格ミステリー小説で時として採用されることのある「多重解決ミステリー」とその精神的な構造において共通するものがあることには注意したい。「多重解決ミステリー」では、1 つの事件（場合によっては複数の事件）の「解答」が次から次へと登場人物によって語られるが、ひとつの解決がより有望な解決によって次々と翻されていく物語構成は、読者が（必ずしもロジックの巧拙によるものではない）異なるレベルで「合理的な解明」を飽きずに幾重

にも経験できるという意味では、清張の方法と共通する機能を果たしていると言っても良い。古典では、アントニー・バークリー『毒入りチョコレート事件』（1929）、比較的新しいものでは、西澤保彦『聯愁殺』（2002）がある。また、多少ニュアンスが異なるかもしれないが、「解決」がそれこそ次から次へと展開される作品としては、小栗虫太郎『黒死館殺人事件』（1935）や、竹本健治『匣の中の失楽』（1977-78）もこのスタイルの本格ミステリーに含めることができるだろう。『匣の中の失楽』は筆者の偏愛する作品のひとつであるが、この作品が登場する 20 年も前に、今や陳腐とも取られかねない刑事たちの地道な捜査を追った清張作品が、飽きも来なければ、無駄に人が死ぬことも無い、多重解決ミステリーの種子を蒔いていたことを知ることは、1 つの大きな発見であった。

名探偵が直面する第 2 の困難についても簡単に触れておこう。推理作家・評論家である法月綸太郎が「後期クイーンの問題」として提起したのがこれである。これは、名探偵は小説内で提示された証拠のみに基づいて推理をするのであるから、仮に、そこで語られない証拠が重要な意味を持っていたのであるとするならば、名探偵といえども必ずしも正しい真相に到達できるとは言い切れないのではないか、というものである。更にこの問題を敷衍して、仮にありとあらゆる証拠・手掛かりが名探偵の知るところであったとしても、「ゲーデルの定理によって、真相にたどり着く保証はない」とも言えよう。「ゲーデルの定理」というのは、クルト・ゲーデルが 1931 年に証明した数学の定理で、その内容は極々簡単に述べると、「数論の公理を含む無矛盾な公理系は、その公理系でその真偽を決定することができない命題を有せざるを得ないという意味で不完全である」というものである。つまり、すべての手掛かりから成る世界を考えたとして、また、その全ての手がかりを手に入れていたとしても、手掛かり同士が矛盾を来たすことが無いのであるならば、手掛かりをどのように料理しようが、そこから犯罪の真相を間違いなく指摘することはできない、という意味になりそうである。そのように本当に「なる」のと、「なりそうである」こととは全く違うので、上の議論はあくまでゲーデルの定理のアナロジーに過ぎず、これで名探偵の存在理由自体が消滅してしまうわけではなく、仮にアナロジーをさらに敷衍するのであるとしたら、これは本格ミステリー小説に限らず、全ての創作作品にも応用されるべきものであり、もっと言えば、清張作品に名探偵が登場しないこととも全く関係が無い。名探偵の問題に触れたので、新本格ではこのような話もよく議論されているという指摘程度にとどめさせて頂く。

（7）清張作品の偉大な小道具たち

清張作品の「本格性」を彩る小道具たちに触れて本論を締め括ろうと思う。

まず第 1 に、「時刻表」である。時刻表が初めて本質的な意味を持って登場したミステリー作品を筆者は不勉強で知らないが（要検証）、清張の『点と線』が時刻表を本格的に「本格性」に取り込んだ最初の作品であることは間違いの無いところであろう。日本国有鉄道の 1 分と狂わない到着発着時刻の正確性という日本固有の鉄道システムと相まって、時刻表を用いたアリバイトリックを始めとするプロットは、『点と線』を皮切りに本格ミステリー小説の一大分野になったといってよい。清張自身、そのような作品を多く書いたが、時刻表トリックの極北である森村誠一『新幹線殺人事件』（1970）や、同作品へのオマージュである、夏樹静子「特急夕月」（短編集『77 便に何が起きたか』（1977）所収）などの大傑作を生み出す契機になったことを考えると、「清張の時刻表」の重要性は計り知れない。

第 2 に、凶器である。清張は短編において極めてユニークな凶器を発案している。その中でも短編集『黒い画集』に収められた、その名も「凶器」（1959）では、それが清張の作品であることを知らない人でもどこかで耳にしたことがあるほどのあまりに有名かつ奇抜な凶器が扱われている。現代の新本格ミステリーで使われたとしても（本歌取りの意味も含めてだが）全く違和感は無いであろう。

より現実的な凶器となると、清張が 1948 年に発生した帝銀事件の謎に取り組んだ際に彼が執拗にこだわった凶器に、事件で使用されたという毒物がある。清張の『小説帝銀事件』（1959）に詳しいが、使用された毒物が青酸カリであるという検察側の主張に、どうしても事件の時間経過との矛盾を感じた清張は、青酸カリとは異なる毒物にたどり着き、しかも、それは最早一犯罪者が簡単に入手可能なものではないことを突き止める。結局、清張は「小説」という形でしか事件の謎を出版することができなかったが（後に、ノンフィクション作品『日本の黒い霧』で再度取り上げる）、事件の実態に合わない、つまり、実際に使用されたとは思えない毒物、という謎が彼の「本格性」への嗅覚を大いに刺激したのであり、フィクション・ノンフィクションの垣根なく、清張作品の本質は「謎とその合理的な解明」である「本格性」であることを、この事件からも我々は再認識するのである。

（8）最後に

この「参考資料」では、「企画書」の精神を引き継ぎ、多くは現在の筆者の知識や記憶に基づき、清張作品の本質は「本格性」であり、この「本格性」への清張のこだわりがあったからこそ、清張文学のヒューマニズム・社会正義といった視点がより明確な形となって表明されることになったのであること、そして、さらに、清張の持つ「本格性」こそは、新本格・本格ミステリーと呼ばれる現在のミステリー小説と矛盾することなく、

むしろそれが花開くための基礎として機能してきたことを、幾つかの断片的な考察で示そうとしてきた。研究本体では、この方向性を更に徹底して行く予定である。

　このように考えてくると、清張を形容する際に頻繁に使用される表現「社会派ミステリー」は、「本格性」の大磐石の上に立った、清張自身の作家としての個性であり、（「本格性」の上に更に個性を積み上げることによって）清張が初めて達成することのできた「付加価値」であるように思えてならない。

プロフィール

名前　　尾崎　裕之（おざき　ひろゆき）
生年月日　　西暦１９６３年１２月２４日生まれ（５９歳）
出生地　　北海道（札幌市）
現職　　慶應義塾大学経済学部　教授

略歴

1. 1986 年 3 月 慶應義塾大学経済学部卒業。学士号取得
2. 1992 年 8 月 米・ウィスコンシン大学（マディソン校）Ph.D.（経済学）取得
3. 1992 年－1993 年 ウィスコンシン大学客員研究員
4. 1993 年 7 月－1996 年 6 月 加・ウェスタン・オンタリオ大学・助教授（Assistant Professor）
5. 1996 年 8 月－2005 年 3 月 東北大学経済学部・助教授（現行制度の准教授）
6. 2005 年 4 月－慶應義塾大学経済学部教授 （現在に至る）

研究分野　理論経済学、数学、不確実性下での意思決定の理論、不確実性下の社会経済活動の数学的分析

主要論文

・Public goods game with ambiguous threshold, with Daiki Kishishita, *Economics Letters* 191 (2020) 109165.（査読付き研究誌掲載論文。以下、同じ。）

・Monetary equilibria and Knightian uncertainty, with Eisei Ohtaki, *Economic Theory* 59 (2015), 435-459.

・Conditional implicit mean and the law of iterated integrals, *Journal of Mathematical Economics* 45 (2009), 1-15.

・Irreversible investment and Knightian uncertainty, with Kiyohiko G. Nishimura, *Journal of Economic Theory* 136 (2007), 668-694.

・An axiomatic approach to ε-contamination, with Kiyohiko G. Nishimura, *Economic Theory* 27 (2006), 333-340.

・Search and Knightian uncertainty, with Kiyohiko G. Nishimura, *Journal of Economic Theory* 119 (2004), 299-333.

・Solutions for some dynamic problems with uncertainty aversion, with Peter A. Streufert, *The Japanese Economic Review* 52 (2001), 251-283.

・Dynamic programming for non-additive stochastic objectives, with Peter A. Streufert, *Journal of Mathematical Economics* 25 (1996), 391-442.

主要著書

Economics of Pessimism and Optimism – Theory of Knightian Uncertainty and Its Applications, with Kiyohiko G. Nishimura (2017). Springer.
(2018 年度（第 61 回）日経・経済図書文化賞受賞)

令和５年３月３１日

第２５回松本清張研究奨励事業　予算書

慶應義塾大学経済学部教授　尾崎裕之

① 書籍代

『松本清張全集』全６６巻　文藝春秋	3,262 円	×	66	＝	215,292 円
本格ミステリーの研究書など	2,700 円	×	10	＝	27,000 円
清張以外の作家の作品（文庫本）	1,000 円	×	100	＝	10,000 円
				小計	252,292 円

② 旅費・謝金

京都１泊（東京発）				45,000 円
広島２泊（東京発）				55,000 円
謝金	20,000 円	×	５名	100,000 円
			小計	200,000 円

③ 物品費

Windows ノートパソコン VAIO Pro PJ シリーズ

VJPJ228000013　　小計　199,800 円

④ 消耗品費

コピー用紙、記憶媒体、報告書作成費、など　　小計　15,000 円

以上　　合計　667,092 円

予算書（承前）積算根拠

① 書籍代

清張の作品の多くは既に文庫本などの形態で所有しているものの、散逸したものも多く、全作品を保有しているわけでもないので、本研究のため、完全な形で保有することが望ましい。

また、本研究では、これまで意識されてこなかった清張の本格ミステリー史への貢献を調査研究するものであるので、特に清張を意識していない本格ミステリーの研究書（例えば、飯城勇三『本格ミステリー戯作三昧』南雲堂、2,700 円）、並びに、清張以外のミステリー作家の作品を網羅的に（しかし、過去の膨大な読書量から、闇雲にではなく、或る程度見込みを立てた読書計画は可能）読み込む必要がある。このために、清張以外の作品を書籍代として計上した。

② 旅費・謝金

調査研究の重要な一環として、清張作品に詳しい方から直接お話を伺い、研究の多方面への展開や、あるいは、全く見落としていた視点を拾い上げることを予定している。このため、識者を訪問するための（とりあえずは関西方面の）旅費と謝金を計上している。

③ 物品費

これは、欠くべからざる費目ではないものの、本研究専用に、ノートパソコン 1 台を使用できると、調査研究の効率性が格段に高まると考えた。そのため、携行に便利な軽量なもので、かつ、過去に使用したことがあるため使い勝手の良さを熟知している VAIO 機を計上させていただいた。価格は、大学生協で提示されているものを掲げている。

④ 消耗品費

これは、そのままの意味です。

以上、ご検討を賜りますと幸いでございます。